２０２４年度

政策課題討議

課　題　紙

注　意　事　項

１．政策課題討議試験は、第一部と第二部に分かれています。第一部は課題に対する意見をまとめ、個別発表及び討議用のレジュメを作成し、第二部は作成されたレジュメを基に個別発表及び討議を行います。
２．課題は**１題**、レジュメ作成時間は正味**２５分間**です。
３．レジュメの作成について
（ア）レジュメ作成用紙は**１枚（片面）**です。裏面は使用しないでください。
（イ）レジュメはコピーを取って、グループ内の各メンバー及び各試験官に配付しますので、レジュメ作成用紙の枠内に濃くはっきりと内容が分かるように書いてください。
（ウ）分かりやすく簡潔に作成してください。形式は自由です。箇条書きであっても、図や表を用いても構いません。
４．この課題用紙は、本試験種目終了後に回収します。
５．下欄に受験番号等を記入してください。

受　験　番　号	氏　　名

指示があるまで中を開いてはいけません。

経済協力開発機構（OECD）の報告書によれば、薬剤耐性に起因する世界の死亡者数が、2050年にはがんの死亡者数を超えて1,000万人になる恐れがあるとされており、こうした背景から、2015年5月に世界保健機関（WHO）の総会で薬剤耐性問題に取り組むための枠組みを示したグローバル・アクションプランが採択された。

我が国では、2016年に「薬剤耐性（AMR）対策アクションプラン（2016-2020)」が策定され、関係省庁等が連携して取り組んできており、2023年に「薬剤耐性（AMR）対策アクションプラン（2023-2027)」が新たに策定された。当該プランでは、ヒト、動物、農業分野などが分野の垣根を越えて取り組むべき課題を次の６つの目標に分けて示している。

(1) 普及啓発・教育
(2) 動向調査・監視
(3) 感染予防・管理
(4) 抗微生物剤の適正使用
(5) 研究開発・創薬
(6) 国際協力

薬剤耐性対策を推進する方策として以下のA及びBがあるが、国としてどちらを優先的に取り組むべきか、あなたの意見に近いものを選んだ上で、選んだ理由、推進するための政策（我が国で既に実行されている政策に限らず、諸外国の政策、自ら思案した政策等の記載も可）等を整理し、個別発表及び討議に用いるためのレジュメを作成しなさい。

意見A：生産者に対する普及啓発や感染予防・管理に係る研究など、生産者をターゲットとして目標に取り組む。

意見B：獣医師に対する普及啓発や抗微生物剤の適正使用に係る研究など、獣医師をターゲットとして目標に取り組む。

なお、レジュメ作成、個別発表及びグループ討議に当たり、参考資料を参考にしつつも囚われることなく、自由に論じなさい。

その後、レジュメを基に、一定の方向を目指してグループで討議しなさい。その際、意見Aについては、衛生水準の向上には費用負担や労務負担が伴うこと、意見Bについては、病性の把握には時間的ロスが伴うことを踏まえて論じなさい。

政策課題討議

参 考 資 料

薬剤耐性(ＡＭＲ)対策アクションプラン（2023-2027） 概要

参考資料１

アクションプランの概要

○　AMRに起因する感染症による疾病負荷のない世界の実現を目指し、**AMRの発生をできる限り抑える**とともに、**薬剤耐性微生物による感染症のまん延を防止**するための対策をまとめたもの。

○　**６分野（①普及啓発・教育、②動向調査・監視、③感染予防・管理、④抗微生物剤の適正使用、⑤研究開発・創薬、⑥国際協力）の目標に沿って**、具体的な取組を記載するとともに、**計画全体を通しての成果指標（数値目標）を設定**。

主な新規・強化取組事項

＜目標１　普及啓発・教育＞

・医療関係者等を対象とした生涯教育研修における感染管理（手指消毒の重要性など）、抗微生物剤の適正使用等に関する研修プログラムの実施の継続・充実

＜目標２　動向調査・監視＞

・畜産分野に加え、水産分野及び愛玩動物分野の薬剤耐性動向調査の充実
・畜産分野の動物用抗菌剤の農場ごとの使用量を把握するための体制確立
・薬剤耐性菌に関する環境中の水、土壌中における存在状況及び健康影響等に関する情報の収集
・環境中における抗微生物剤の残留状況に関する基礎情報の収集

＜目標３　感染予防・管理＞

・家畜用、養殖水産動物用及び愛玩動物用のワクチンや免疫賦活剤等の開発・実用化の推進

＜目標４　抗微生物剤の適正使用＞

・「抗微生物薬適正使用の手引き」の更新、内容の充実、臨床現場での活用の推進

＜目標５　研究開発・創薬＞

・産・学・医療で利用可能な「薬剤耐性菌バンク」での分離株保存の推進、病原体動向調査、AMRの発生・伝播機序の解明、創薬等の研究開発の推進、海外における分離株のゲノム情報の収集
・「抗菌薬確保支援事業」による新たな抗微生物薬に対する市場インセンティブの仕組みの導入
・医療上不可欠な医薬品のサプライチェーンの強靱化を図り、我が国における安定確保医薬品の安定供給に資するよう、「医薬品安定供給支援事業」の実施
・適切な動物用抗菌性物質の使用を確保するため、迅速かつ的確な診断手法の開発のための調査研究の実施

＜目標６　国際協力＞

・「薬剤耐性(AMR)ワンヘルス東京会議」の年次開催の継続を通じた、アジア諸国及び国際機関の関係者間の情報共有、各国のAMR対策推進を促進

～畜産農家の皆様へ～　抗菌剤を慎重に使用しましょう。

背景

- 抗菌剤は家畜の健康を守り、安全な食品を安定的に生産するための重要な資材です。
- 抗菌剤を家畜の病気の治療に使うと、薬剤耐性菌が生き残って増えることがあり(薬剤耐性菌が選択される)、抗菌剤の効きが悪くなることがあります。
- また、薬剤耐性菌が食品などを介して人に感染した場合、人の病気の治療に使う抗菌剤が、十分に効かなくなる可能性があります。

そのため・・・

関係者が連携して抗菌剤の慎重使用に取り組むことが必要です。

獣医師、生産者、動物用医薬品業者、家畜保健衛生所 等

目標

◆ 家畜での薬剤耐性菌の選択と伝播を抑える。

- 家畜での抗菌剤の有効性を保つ。
- 人への薬剤耐性菌の伝播を抑え、人の治療に使う抗菌剤(※1)の有効性を保つ。

慎重使用の具体的な取組

① 飼養環境を整え、家畜の健康を維持し、ワクチンを使って感染症の発生を予防しましょう。

② 過去の感染症の発生状況を確認し、原因菌を特定しましょう。

③ 抗菌剤を使用する場合は、まず、感受性試験などを行い、有効な抗菌剤を選びましょう。

④ フルオロキノロン等の第二次選択薬(※2)を最初の治療から使用するのは避けましょう。

⑤ 感染症や薬剤耐性菌の状況などに関する情報を、関係者間で共有しましょう。

（※1）フルオロキノロン、第３世代セファロスポリン、15員環マクロライドなどは、人の医療で重要性が高いとされています。

（※2）第二次選択薬として承認されている抗菌剤の成分や製剤は、動物医薬品検査所HPに掲載しています。
URL:https://www.maff.go.jp/nval/yakuzai/yakuzai_p4.html
動薬検HP内で　第二次選択薬　製剤一覧　検索

農林水産省 消費・安全局 畜水産安全管理課

参考資料３

１１月は薬剤耐性（AMR）対策推進月間です

～ 獣医師の皆さん、抗菌剤の慎重使用等対策を進め、
消費者の皆様の信頼に応えましょう！ ～

薬剤耐性菌って？

薬剤耐性菌とは、「抗菌剤が効かない細菌」です。
薬剤耐性菌は、抗菌剤の使い過ぎなどにより増加し、人や動物の治療が困難になります。

薬剤耐性問題と畜産との関わりは？

抗菌剤は、畜産分野でも、動物用医薬品や飼料添加物として使用されています。
家畜への抗菌剤の使用により増加した薬剤耐性菌が、家畜の治療を困難にするだけでなく、畜産物等を介して、人の感染症の治療を困難にすることが懸念されています。

薬剤耐性対策ってどうすればいいの？

→ 次の４つのポイントに取り組んで、**抗菌剤の“慎重使用”を徹底すること**が重要です

1 感染症を予防する

適切なワクチン接種、飼養衛生管理水準の向上（施設内の洗浄・消毒の徹底、十分な飼養スペースの確保等）について指導を行い、**感染症を予防しましょう。**

2 的確に把握し、診断する

家畜の健康状態、発病後の経過、原因病原体、過去の感染症の発生状況等を**把握し、適切に診断しましょう。**

3 抗菌剤を正しく選択する

抗菌剤を使用する必要がある場合には、薬剤感受性試験の結果等を踏まえ、**抗菌剤を正しく選択し、必要最小限で使用しましょう。**

4 情報を共有する

農林水産省が公表する全国ベースの薬剤感受性の状況、地域における感染症の発生状況・薬剤感受性の情報等、薬剤耐性に関する情報を関係者間で**共有しましょう。**

詳細は、農林水産省HP（http://www.maff.go.jp/j/syouan/tikusui/yakuzi/koukinzai.html）に掲載しています。 **農林水産省　抗菌性物質** 検索

◇ 抗菌剤の慎重使用の取組事例 ◇

豚

- 大腸菌症により離乳豚の10%以上が死亡
- ビコザマイシンなどの抗菌剤を使用したものの、菌が耐性化し、沈静化せず

↓

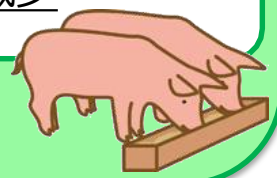
- 抗菌剤の使用を８ヶ月間休止

↓

- 感受性試験を行った結果、ビコザマイシンなどに対する菌の感受性が改善したため、ビコザマイシンなどの使用を再開
- 抗菌剤の選択は、感受性試験に基づいて行うことなどの取組を一層徹底

↓

- 大腸菌症は沈静化し、死亡頭数が５%以下に減少



肥育牛

- アンピシリンなどの抗菌剤を第一次選択薬として3年間使用した結果、パスツレラ菌が耐性化し、治癒率は50%に低下

↓

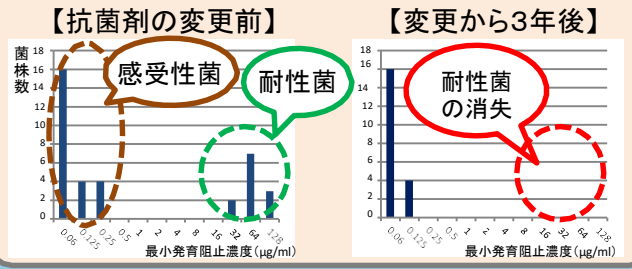
- 感受性試験で有効な抗菌剤を確認し、抗菌剤をアンピシリンからフロルフェニコールに変更
- アンピシリンは３年間使用を休止

↓

- 治癒率は90%に改善
- アンピシリンに対する菌の感受性が改善

（今後、フロルフェニコールの感受性が低下した場合には、再度アンピシリンを使用することを検討）

パスツレラ菌のアンピシリン感受性の変化



※NOSAI山形 加藤らのデータより引用

ブロイラー

飼養衛生管理の徹底

- 素びな導入前の水洗・消毒の徹底
- 適切な飼養管理と飼養環境づくり
- ワクチン接種の確実な実施
- 疾病や飼養管理などに関する定期的な学習会や指導

＋

第二次選択薬の使用制限

- 第二次選択薬であるフルオロキノロンは、最終選択薬として感受性試験後に使用し、通常は使用しない

↓

- 大腸菌症の発生件数が大きく減少
- フルオロキノロンの耐性率が減少